

「聴覚障がいからみた UD の調査・研究」

ー 会津若松駅前広場における新たなバスターミナル・待合所の UD 提案

A2201426 高橋千紘

研究の背景

会津若松市は、第6次長期総合計画において、重点的に取り組むべき政策の柱の一つに「安心して暮らせるやさしいまちづくり」を位置づけている。また、その具体的な推進を図るため、平成19年に「会津若松市ユニバーサルデザイン推進プラン」を策定し、「すべての人にやさしく、暮らしやすいまち」の実現を目指して、ハードの整備やソフト事業、さらには意識づくりも含めまちづくりの各分野にわたり取り組んできた。こうした会津若松市におけるUD(ユニバーサルデザイン)の取り組みが行われる中、少しずつではあるが、会津若松市内における施設や道路、観光地等にてUDを取り込んだものが増えつつある。高齢化社会となっていく社会変化がおこる日本において「UD」はますます必要性が高くなる。会津若松市も例外ではなく、むしろ高齢者層の増加が特に顕著であることから特に対策が求められるはずだ。また、UDにおいて、聴覚障がいの視点からデザインされたモノの数は少ない。視覚障がいの方や肢体が不自由な方を対象にしたデザインに目が行きがちになる。ここでは、自らの障がいからの視点も含め、「UD」の「すべての人を対象にしたデザイン」の概念の中で主に聴覚障がいの方にヒアリング、現地調査等を行いながら、会津若松市におけるUDの活性化の過程においてどのような提案ができるかを考えながら調査・研究を行っていく。

研究の目的

プレ調査、現地調査、ヒアリング等を行い、それらの過程でどのような提案ができるかを分析しつつ、一つの施設を対象に最終的には模型等でのデザイン提案を行う。自らの障がいの視点から感じたまちなかの違和感、不便な点をピックアップしながら研究を行う。タイトルにもあるようにメインとして「聴覚障がい」からの視点で取り組む中で、会津若松市の聴覚障がい者が暮らしやすいまちづくりとしての視点のみでは「バリアフリー」となってしまう。あくまで目的は「会津若松市におけるUDの活性化」であり、「すべての人を対象」にして調査・研究を行うものであり、特に聴覚障がいからみたデザインがその「UD」に昇華され、その一端として会津若松市のUDの活性化を期待したものである。

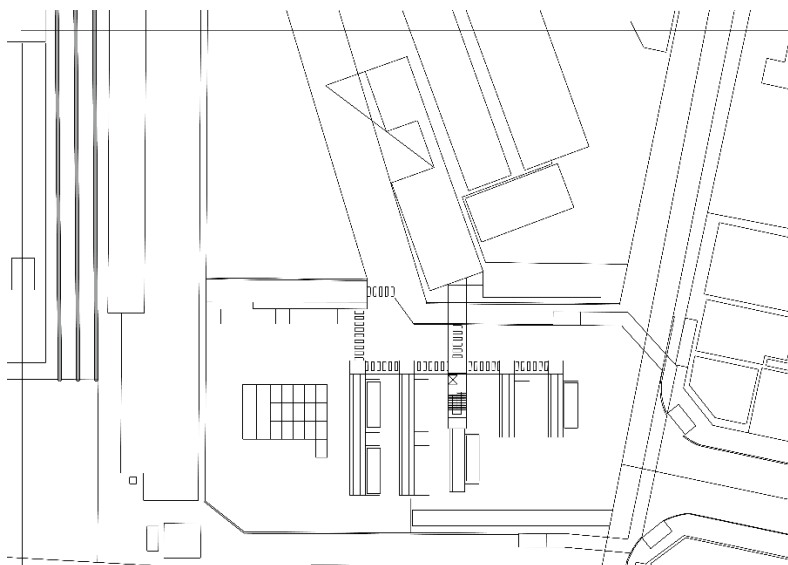
調査研究のプロセス

まずインターネットや現地調査を通じ会津若松市のUDや聴覚障がいのプレ調査を行った。現地調査では会津若松市内を調査し不便な点をピックアップすることを行う目的で、主に駅前や大通りなど人が使う機会が多い場所をあらかじめ聴覚障がいの視点をメインにしたUDのピックアップを行い、その場所を重点的に調査した。また、夏休みを利用して会津若松市役所の障がい者支援課と手話サークル「みみごえ会」へのヒアリングを行った。障がい者支援課では聴覚障がい者のための身の回りのもの、会津若松市における聴覚障がい者の現状、会津若松市で行われている手話通訳や要約筆記の設置の取り組みなどについて聞き込みを行った。「みみごえ会」というろうあ者の手話サークルのヒアリングも2回に分けて行ったが、手話通訳者の方にも協力してもらいながら、まちなかの不便さについてヒアリングもした。その後、今までの調査結果を踏まえ、「駅」や「バスターミナル」に重点を絞った。聴覚障がいの方に不便だと感じる人が多いことや、元々異なるバス停が二つあることで発着場の違いによるわかりにくさに焦点をあて、「会津若松駅前広場・バスターミナル」を中心に、聴覚障がいからみたUDとしてのデザイン提案を行い制作を行う。



最終成果物

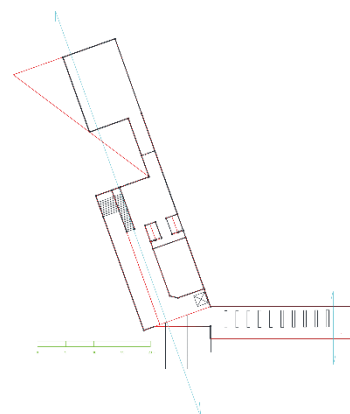
「みみごえ会」のヒアリングにおいて、障がいの内容はそれぞれ異なったが、まちなかの不便さについてはどの方も共通点が多かった。特にまちなかの不便さで顕著だったのは、「駅」や「バスターミナル」である。4人の方全員が「駅」や「バスターミナル」に不便さを感じている結果となった。具体的な内容は、「(バスや電車)音声だけで状況が判断しにくい」→次に止まる駅やバス停が分からない、遅延や運休、災害時のアナウンスが分からないなど「見えない」ことが不便で、時には危険である事を感じているようだ。そのためデザイン提案として「駅」や「バスターミナル」に重点を置くことにした。また、会津若松駅のバス乗り場は元々、会津若松駅前広場と会津若松駅前バスターミナルの二つがあるが、二つに分かれていることで、発着場の分かりにくさがあった。これをわかりやすく一つにまとめ、聴覚障がいや、会津若松らしさという視点からも、可視的でわかりやすく雪国会津らしいデザインをめざし、UDの要素を取り入れ、新たなバスターミナル、待合所を木造模型でデザイン制作を行った。他に、聴覚障がい者と状況が似ていることを考慮し、外国人向けのUDを取り入れたものを意識してデザインも行った。



・会津若松駅前広場バスターミナル

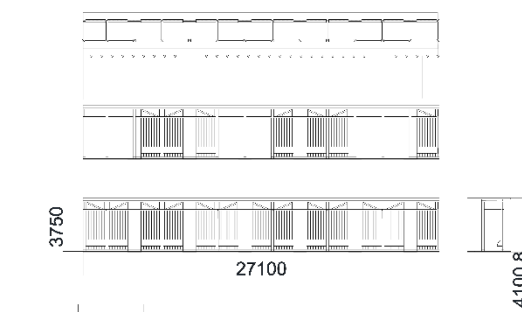
新しくデザインした会津若松駅前広場

・バスターミナルの図面



・制作模型

デザインの一つとして制作を行ったバスターミナルの模型。



考察

手話サークル「みみごえ会」のヒアリングを行うにあたり、感じたことは、「視覚情報の重要性」と「コミュニケーションツールの充実」である。手話サークルの会長様より、まずは「みみごえ会」の成り立ちについて、お話を伺った。ろうあ者にとって普段から手話を使うことの重要性は教育面や社会面におけるコミュニケーションなどでも重要であることを実感した。十分な教育を受ける事ができず、健常者と同じような学力を養う事は難しかったため、文章が苦手な方が多く、社会に出て上手くコミュニケーションを取れない人が多かった。それらの不便を解消するため、手話サークルを立ち上げ活動してきたそうだ。それらの話を聞いて、聴覚障がい者にとって手話は最も情報理解や判断、コミュニケーションに欠かせないツールであり、文章などの煩わしさから解放されたスピーディで分かりやすいツールを求めているのではないかと感じた。それらは聴覚障がい者にとってのみではなく、健常者やお年寄り、他の障がいのある方にとってもUDとして求められる要素ではないかと感じ、ハード面からもソフト面からもデザインとして手話のようなもの＝すばやく判断でき、ぱっと見てわかるデザインがUDで求められるものであるはずだ。アンケートと同時進行でヒアリングを行ったが、聴覚障がい者の方の手話を手話通訳者の方を通じ話してもらいながら、更に要約筆記を通じてコミュニケーションを行い、その際、1人1時間のペースでヒアリングを行ったためかなり時間がかかり、負担をかけてしまったことから、やはり、普段からコミュニケーションツールを充実させることの重要性を感じた。

バスターミナル・待合所のデザインを行うにあたり、もっとも意識したことは「見える」ことである。聴覚障がい者にとってのみではなく外国人にとっても「情報が見えない」ことは最もストレスなことであり、できるだけ可視的で見渡しがいいデザインにしたいだけでなく、誰が見ても一目で何かわかるようにすることを意識したことで、「どうしたらよいかわからない」というストレスが少しでも軽減されるはず。また、近年は駅やバスでの電光掲示板の設置などにより不便はどんどん解消されてきているが、それでも緊急時など、即座に対応しにくい場合の取り組みが求められると感じ、常に目がいきわたりやすい文字情報がある、さらには手話通訳者が駐在するような環境にする必要性を感じた。他にバスターミナルをデザインするにあたり、混在していたバス乗り場を待合所も含め分かりやすく一つにまとめたことだけでなく、観光地であること、雪国である事を考慮し、融雪、防雪設備を取り入れたもの、会津若松市の地域特性を生かしたバスターミナル(レトロな町並み、雪国、など)、会津若松らしいデザインも意識したことで、観光地としてのイメージの貢献もできると考える。これらのデザインを通じ、会津若松市らしい思いやりのある「UD」がさらに発展することを願う。